

広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	「甘え」の言語的起源
Author(s)	黄, 萍
Citation	HABITUS , 21 : 43 - 58
Issue Date	2017-03-23
DOI	
Self DOI	10.15027/42916
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00042916
Right	
Relation	



「甘え」の言語的起源

黄 萍

(燕山大学講師 広島大学客員研究員)

1. はじめに

「甘え」という言葉は、精神医学者土居健郎がアメリカ留学中の文化体験から、日本人の心理の特性と深い関係があることを見いだした言葉である。彼によれば、「甘え」とは、「乳児の精神がある程度発達して、母親が自分とは別の存在であると知覚した後に、その母親を求めていることを指している言葉である」¹⁾。つまり、母親に十分に世話をされてきた赤ん坊は、生後一年の後半になって母親から分離した存在として自分があることがわかるようになると、以前の完全な母との一体の状態に戻ろう、あるいは少なくとも近づこうとする。このような完全な依存状態を再び確立しようとする子どもの試みが「甘え」というのである。

土居は「甘え」という言葉を日本文化や日本人の心理を解説するカギ概念として抽出し、またそれは「日本語独特のもの」(土居10頁)であると推測する。無論、それまでに土居一人だけが日本文化や日本人の心理について探求していたわけではないが、実は早くから「恥」「恩」「義理」「人情」「風流」など数々のものが日本人を知るキーワードまたカギ概念として挙げられてきている。ただし、土居の『「甘え」の構造』以来、彼が唱える「甘え」は、一種の流行語ともなり、日本人の性格が問題として取り上げられるとき、しばしば日本人に固有な心理的特性とみなされるようになった。「土居による〈甘え〉の発見は著大な功績の一つである」²⁾と芳賀紓は高く評価している。そして、土居の『甘

え」の構造』が刊行された時に、彼は「すぐれた精神医学者である著書は、体験的に日本人の心的特性について思いをめぐらすうちに、それは日本語の特性と結びついているにちがいない—と考えるにいたる。そして、「甘える」をカナメの語とし、「すねる」「ひがむ」「こだわる」「すまない」等々隣接関連の語として、その連関状況に反映している精神構造を、一步一步とつきとめてゆく……人情、義理、恥、遠慮など、「日本人らしさ」の目録を成す諸概念を土居が「甘え」というカギ概念のもとに統合して理解しようとする点に土居の著書の新しさがある」（芳賀126頁）という書評も書いている。換言すれば、「多くのカギ概念をそれぞれ並立させるのではなく、それら相互の意味関連を秩序立て構造化したことによって、複数のカギ概念が群化され、いわば構造化された」（芳賀126頁）ところが、土居の著作のオリジナルであると言ってもよい。この意味では、土居の「甘え」の概念の発見は誠に画期的な貢献をなしていると言っても過言ではない。

さて、土居が言う「甘え」という概念は一体どのようなことを意味しているか、その言語的起源は何だろうか？それを究めるには、関連的に想起されやすい「甘える」と「甘い」から出発すれば無難であろう。

2. 甘い・甘える

日本語には甘えの心理を示すものとして、ただ、「甘える」という一語だけが単独に存しているのではなく、それ以外に多数の言葉が甘えの心理を表現していると土居は言う。その数多くの言葉の中で氏はまず「甘える」と語源を同じくする「甘い」という形容詞を挙げて、「『甘い』という形容詞が、口にするものが甘いと言う以外に、AはBに甘いという時のように、人物の性質をあらわすために使われる場合がある。これはその人物がひとを甘えさせる傾向があるということを意味する。またこれとは別に、事の真相を把握していないとい

う意味で、例えば見方が甘いという場合もある。それは当人が何かに甘えている結果であると考えてよいであろう。」(土居34頁)と述べている。このように、氏は動詞の「甘える」を解釈するために、形容詞の「甘い」を借りて説明する。ところが、「甘い」の意味合いを説明するときには、逆に動詞の「甘える」で以って解釈する。それは実に興味深いところである。おそらく「甘い」と「甘える」は切っても切れない繋がりのある二語であろう。

『日本国語大辞典』³⁾で「甘い」と「甘える」を調べてみると、以下のことが分かってくる。「甘い」について、「味覚に関していう。⇔辛い。」と「心理的に砂糖や蜜の味のように感じられるさま。」と「心理的に、塩気のきいていないような感じということから、厳しさ、鋭さ、強さなどに乏しいさま。」の三つの意味が挙げられる。それに対し、「甘える」にも三つの意味が挙げられる。すなわち、「甘味がある。甘いかがりがする。」と「相手の理解ないし好意を予想した上で、慣れ親しんだ行為をする。」と「恥ずかしく思う。きまり悪く思う。はにかむ。てれる。」の三つである。

上に示すように、「甘い」は砂糖や蜜のような感覚・感情を表す言葉であり、その意味合いは味覚から味覚以外の感覚へと、更に心的感覚から心的感情へと拡張している。一言で言うと、「甘い」では生理的な感覚の甘味から更に抽象度の高いものである心理的な感覚の甘味へと意味が拡張している。それに対し、「甘える」ではそのような意味の明確な拡張化は起こっていない。しかし、「甘える」は、「甘い」の意味が発展したものであると理解してほぼ間違いがない。「甘える」の一番目の意味が「甘い」の一番目の意味と重なっていることは言うまでもない。その二番目の意味は一見して「甘い」とあまりかかわりがないが、「相手に自分のことを甘く見てもらおう」という点に着目すれば、繋がっているようにも見える。ただし、「AはBに甘い」と言う時と「AはBに甘える」と言う時とでは、甘えの授受方向性を考えるならば、二者は逆の方向性を持つ

ている。換言すれば、前者は相手Bに甘えさせることであり、後者は相手Bに甘えさせてもらうことである。さらに「甘える」の三番目の意味は、「相手の好意を受けててれくさくなる。或いは相手に好意を受けさせてもらうことに恥ずかしく思う」とあるから、二番目の意味にも関係しそうである。ただし、二番目の意味は「振る舞い」についてのものであるのに対し、三番目の意味は「心情」についてのものである。要するに、「甘い」は感覚や感情が蜜のような状態であることを表すのに対し、「甘える」は「甘い」が形容する状態になろうとする心情や振る舞いを表す。このように解釈するならば、「甘(あま)」を活用させたもので、「甘い」状態である、また、そのような状態になるのをいう」とある「甘える」の最初の面白い説明文ともぴつたりと合う。なぜそれが面白いかというと、「甘い」で以って「甘える」を解釈しているからである。しかし、同辞典の「甘い」という項目のどこにも「甘える」という語が見当たらず、「甘い」の意味がいずれも同じく「砂糖や蜜の味」で説明されている。このことは、もしかすると、「甘える」よりも「甘い」のほうが先に発生したことを暗示しているのではないか。前にも触れたように、土居は「甘い」と「甘える」の意味解釈において、前者を借りて後者を説明したり、後者を借りて前者を説明したりしている。それはなぜなのか。おそらく現代社会において「甘い」と「甘える」の二語が既に定着しているので、土居はその事実を受け止めるだけで満足し、二語のうちどちらが歴史的に先行したのかというような国語学的な問題に全く無頓着だったのではないだろうか。

上述の日本国語大辞典の語義解釈を纏めれば、次の二点が明らかになる。その一つは、「甘える」は「甘い」と同根であるということ、もう一つは、「甘い」は「甘える」に先行するということである。

となれば、「甘える」の語源を探るためには、最初に「甘い」の語源を探るのが有効であろう。

3. アマシ・ウマシ・アマナフ

あまい【甘い】語源について、「ウマシ」と「アマシ」は、語源が近いというのが大言海の説です。そうした「甘美なものを食べる口形から出た語」であろうというのが有力な語源説です。方言で、アマー、アミヤー、ウミヤーなどという言葉が生きています。アマエル、アマヤカス、も同源の動詞です。転じて、人事などで、手ぬるい、厳しくない態度などに用います。△中国語源【甘】…「口＋、(甘いもの)」。口の中に、甘い物を入れた文字。⁴⁾

上の記載からすれば、現代語の「甘い」の語源を考える場合、古語の「アマシ」を考えていいということになる。大言海によれば、「ウマシ」と「アマシ」は語源が近いという。従って、「ウマシ」の語源を明らかにすれば「アマシ」の語源も分かるようになる。無論、逆にしても同じ結果が出る。土居が「大言海にも、甘しは旨しに通ずるということが書いてある」(土居102頁)と述べたのも、この点を捉えたものであろう。また、「アマー、アミヤー、ウミヤー」などの意味を同じくする方言も生きていれば、「アマエル、アマヤカス」などの語源を同じくする動詞も生きている。語源説からすれば、「甘い」は、もともと「甘美なものを食べる口形から出た語」だとされる。これは「口の中に、甘い物を入れた文字」である中国語の漢字「甘」とも語源がほぼ一致する。もしかしたら、「甘い」の「甘」は中国語の漢字「甘」を借用した表記ではないだろうか。

更に『日本語源広辞典』よりもやや古い時代の1984年に出版された『日本語語源辞典—日本語の誕生』には、「アマシ」の意味は「アマナフ(和)と同根。アマナフとは和合すること。アマシとは口当たりが大変によく和合する意で、砂糖・飴などの味にいう」⁵⁾とある。そして同書の33頁に「アマナフ」について以下のように記載されている。

「相間成・ふ」物とものとの間合が、ぴったりとうまく相合うこと。仲よくする。協調する。この語はアマシ(甘)の派生語として、甘受する意に解されているが、それは転義で、協調和合の意と解するほうがよい。ア音の母義に相当する相からは、この語の方が甘シに先行すると考えた方が理解に便である。勿論実際にはアマナフとアマシは母義の相から同時的な派生関係であってよいのである。(清水33頁)

以上から分かるように、「アマシ」と「アマナフ」とでは、どちらが先行しても、同根の関係は変わらない。どちらも「よく和合する」という意があり、「アマシ」は「口当たりの和合」を強調するのに対して、「アマナフ」は「仲の和合」を強調する。両方の意味を合わせてみれば、現代日本語の「甘い」に近い意味になる。おそらく「甘い」は、〈甘美なものを口にする口当たりの和合〉すなわち〈ものともとの合間がぴったりとうまく合会うこと〉という本来の意味が、「人と人との合間がぴったりとうまく合会うこと」というように〈人間関係の和合〉の意味に転じて用いられたのであろう。

4. 天・アマ・アメ・ウミ

土居は甘えの語源を追跡する際に、〈甘え←アマ←天←天照大神〉というルートが示すように「甘えの語源と天照大神の神話は同じ根から出発している」(土居104頁)と推測している。これはあくまでも推測にとどまり、その証拠を土居は出していない。筆者は、甘えの語幹であるアマを調べながら、土居の推測が妥当であるかどうかを検証する。

アマは「ひろびろとした大空。日、月、星などが運行し、神々のいる天。あめ。」である。この語は単独ではあまり用いられず、ふつう「天つ」(「つ」は「の」の意の上代の格助詞)や「天の」の形で用いられるか、あるいは二語の万

葉仮名が当てられる。例えば、「やすみしし我が大君の 隠ります 阿摩(アマ)の八十陰(やさかげ)出で立たす 御空(みそら)を見れば」(日本書紀 卷第二十二)のように。アマは上代には主として高天原(たかまがはら)に関する事象に用いられた。例えば、「天人(あまびと)」「天降(あまくだ)る」のように。中古以降は空の意にも用いられた。例えば、「ひさかたのあま行く月を」(万葉集・二四〇)のように。要するに、ここでのアマは「天(てん)。空。」という意味である。この点は全く疑問のないところであるが、ただし、アマについて、日本国語大辞典では「「あめ」の古形といわれる」とあるのに対して、日本古語大辞典と大言海では「アメ(天)の転」とある。また、大島正健は「アメの転という説を誤りだ」とする。さらに、白鳥庫吉は「ウミ(海)の転。広大な場、間という意。マ、メ、ミは場、間の意。アは接頭語である。」とする。そこで、アマとアメとではどちらが先行するのか、またこれらはウミといかなる関係があるのか新たな問題となる。

これに関連して、中西進は「古代の人々は天も雨も、そして海までも全部、一つのものだと考えていたが、「あめ」が指し示す原始のものは、「天」だったのではないかと。そして、このような考え方はどうも日本に限ったものではなかったようである」⁶⁾と述べている。その論拠として、まず挙げられるのは世界中のさまざまな伝説である。例えば、旧約聖書(創世記)に、深淵の源と天の窓が開かれ、そこから雨が地上に降り注ぎ、その雨は四十日四十夜も続いた。そこで、ノアは方舟に家族や生き物を乗せ、人々は船出をしたという話がある。古代のヘブライ人やユダヤ人も、天上が水の世界だと考えていたとされる。インド最古の聖典「リグ・バーダ」でも、宇宙は水であり、創造神は太初の原水から生まれたとされる。また、ネイティブ・アメリカンのナバホ族の中に、天地の果てに海があるという内容の歌が現代まで伝わっているとされる。(中西63頁)

昔の日本にもこれに似た話がある。例えば『日本書紀』における創世神話が

そうである。「古に天地未だ割れず、陰陽分かれざりしとき、混沌れたること鶏子の如くして溟滓にして牙を含めり。其れ清陽なるものは、薄靡きて天と為り、重濁れるものは、淹滞ゐて地と為るに及びて、精妙なるが合へる搏り易く、重濁れるが凝りたるは竭り難し。故、天先づ成りて地後に定る。然して後に、神聖、其の中に生れます。故曰はく、開闢くる初に、洲壤の浮れ漂へること、譬へば遊魚の水上に浮ける猶し。」（日本書紀巻第一 神代上）とある如く、「まるで海のような世界から最初の神が誕生し、国土が生産されていく様子が描かれている」（中西64頁）という。このように、中西によれば、古代の人々は頭上に広がっているはかり知れないほど広大なものを「あめ(天)」と呼び、そこから時おりこぼれ落ちてくる水を「あめ(雨)」と呼び、また水を漫々と湛えた海を「あま(海)」と呼んだとされる。こうして、古代日本人の世界観においては、アマ、アメ、ウミの三つが同じものとして考えられていたことが推測される。しかしさらに、これらの内のどれが先行したのかはよく分からない。

それを究めるために、アメの語義を再度調べることにする。アメは「天。空。⇔地(つち)。」や「天つ神のいる処。高天原。また神のいると信じられた天上界。」という意味である。「日本神話に登場する、高天原に属する神やものの美称をつくる。「あめ…」「あめの…」の形で用いる。」との記述は、前述したアマについての解釈と殆ど一致する。そこから、アメはアマと同じく「天」を指す言葉であると分かる。

ところで、橋本進吉は『上代特殊仮名遣』、『国語音韻の変遷』、『古代国語の音韻に就いて』の三著書において古代日本語の音韻変遷について論じている。橋本は仮名の50音図でいうイ段のキ・ヒ・ミ、エ段のケ・ヘ・メ、オ段のコ・ソ・ト・ノ・(モ)・ヨ・ロの13字について、奈良時代以前には単語によって甲類と乙類の2種類に書き分けられ、両者は厳格に区別されていたと指摘する。また『古代国語の音韻に就いて』において、2種類の相伴うルールについて以下

のように述べる。「或る仮名の甲類はいつも他の仮名の甲類と相付き合い、乙類はいつも乙類と相伴って同じような場合に用いられるということは、活用以外の場合にも見られるのであります。例えば「タケ」(竹)なら「タケ」が「タカムラ」(簗)となって「ケ」が「カ」に変わります。これと同じような現象が「へ」にも見られる。「うへ」(上)が「うはば」(上葉)になる。「メ」も「マ」になります。「天(アメ)」が「天(アマ)」になる。こういう音の変化があります。この「カ」「ハ」「マ」にかわる「ケ」「ヘ」「メ」は、いずれも乙の類に属するもので、四段已然形と同じ形であります。」と。このように、もし橋本の論述が正しいとすれば、「アマはアメの転」という語源説のほうがおそらく信憑性が高いだろう。

上述した調査から分かることは以下の三点である。

第一に、アマとアメは「天。空。高天原に関する事物や神。」を指す言葉である。第二に、古代の日本人の世界観では天、雨と海は一つのご概念として考えられていたが、「あめ」が指し示す原始のものは「天」である。第三に、アマはアメの転音である。

こうして、アマは「天」や「高天原の神」に一層近づくが、しかし、『古事記』によれば、高天原には天照大神一人だけではなく、数多くの神がいるとされる。とすれば、なぜ土居は天に、他の神々ではなく、天照大神だけを結び付けて、「甘えの語源と天照大神の神話は同じ根から出発している」と推測するのであろうか。これが言えるためには、天との結びつきは天照大神のみが妥当であって、他の神々が不当であるという理由をさらに示す必要があろう。それをしていないのは、暗黙の了解があるからではないだろうか。すなわち、「日本人の祖神とされる天照大神が大変母性的な人間的な神である」(土居104頁)という前提が、そのまま推測の根拠となっているのではないだろうか。だとすればこれは明らかに論点先取の誤りである。

それでは、次にアマが母性とどう係っているのかを検討する。

5. アマ・ママ

『語源を探る』では「子供が飲食する時に発する言葉とか、また親、ことに母親を呼ぶ時の言葉、あるいは母親代わりの人を呼ぶ時の言葉は、各国共通性が多い。」⁷⁾とある。確かにそうである。それは実に面白いことである。英語圏では母親はママ(Mom)・マミー(Mommy/Mummy)が一般的である。地域によっては、ママ(Mama)と呼ぶことがある。ドイツ語ではママ(Mama)、オランダ語もママ(Mama)、フランス語ではママン(Maman)、ロシア語ではマーマ(Mama)、スペインではママ(Mamá)・マミ(Mami)、イタリア語、ラテン語ではマンマ(Mamma)である。中国語の標準語(普通話)ではママ(妈妈)が一般的であるが、中国の南方方言ではムンマ(姆妈)という呼び方もある。日本語では子供が母親をママ(mama)と呼ぶ。各言語において母親はいずれも[mama]に近い発音を有している。全く新村出が言うように、「母親を呼ぶときの言葉は各国共通性が多い」。これは偶然であろうか、それともそのように発音される必然性があるのか。

世界の言語は起源(祖語)を同じくする、語族といういくつかのグループに分かれている。例えば、英語、ドイツ語、フランス語など、ヨーロッパの言語の多くはインド・ヨーロッパ語族に属しており、アラビア語やヘブライ語はアフロ・アジア語族に、中国語(北京語)やタイ語はシナ・チベット語族に属している。同じ語族に属する言語は、起源を同じくするとされているので、互いに似た音や語、文の構造を持つ傾向にある。一方、異なる語族に属する言語では、借用語(外来語)である場合や偶然に音や語などが似る場合があるが、それはごく限られた範囲でしかない。しかし、上に述べたように、この「母親」の幼児語にかぎっては、非常に似たパターンの音韻構造の語を持つ言語が、語族を超えて多く観察されている。1959年に、人類学者のマードックがこの事実を報告した。マードックによれば「世界の多くの言語において、幼児語で母親を指す語は「マ

「甘え」の言語的起源

マ [mama]」「ナ [na]」「アマ [ama]」など、[m]または[n]という子音と、口を比較的大きく開けて発する母音の組み合わせであることが多い(図1⁸⁾)。」とされている。

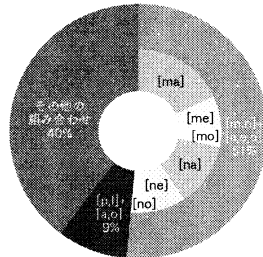


図1：「母親」を表す幼児語の音(標本数：474言語コミュニティより531)

異なる歴史を持つ言語において、これほど似た傾向がみられるのはなぜだろうか。それについて音声学や乳児心理学における解釈がある。以下はその簡単な纏めである。

音声を発声するときに肺からの空気が通る部分、声帯から口唇までの空洞を声道と呼ぶが、新生児の声道は未発達で、大人の声道とはかなり異なっている。生後6～8ヶ月頃からだんだん大人の声道に近づいていく。個人差はあるが、子どもは生後6週目頃から母音のような音を発するようになり、4～5ヶ月頃には [ma]といったような、[子音]+[母音]から成る喃語と呼ばれる音の連続を発するようになる。最初は [ma] のような1音節から始まり、次第に [mama] というように、反復した音節が現れるようになる。そして1歳頃になると、特定のものを指すのに一貫して同じ音(の連続)を使う、つまり「語」を発するようになる。

さて、子どもにとって発音しやすい音・構造とはどのようなものなのであろうか。まず、構造に関しては、喃語の段階で多くみられるように、[子音]+[母音]の組み合わせが発音しやすい構造であると考えられる。日本語の音の基本単位である拍(モーラ)がちょうどこれにあたる。次に、音に関しては、母音に

ついては、同じく喃語段階で圧倒的に多く観察されるのは中母音か低母音で、高母音はほとんど現れないようである。日本語でいうと、「ア、エ、オ」にあたる。子音においては、喃語段階での出現頻度をみてみると、頻度が高い順に、 $[m] = [b] > [p] > [d] > [h] = [n] > [t]$ …と続くとされている。子どもが子音を獲得していくプロセスは、概して、口の入り口付近から奥へと順に進むとされているが、喃語には、調音位置でいうと両唇音や歯茎音、調音法でいうと鼻音と閉鎖音が多いのである。これらの音を、口の周りの筋肉や唇、舌の動きや緊張度を意識しながら発音してみると、その理由がわかると思う。とくに[m]は、口を閉じて鼻から空気を出すだけであるから、非常に発音しやすいと言える。こうしてみると、子どもにとって最も発音しやすい音としては、[発音しやすい子音]+[発音しやすい母音]の組み合わせである[鼻音]+[中母音または低母音]、すなわち[ma(ma)]であるだろう。ただし、喃語の段階では、発声する音が何かを指しているわけではない。つまり、赤ちゃんが初めて発生する「まーまー (ma-ma-)」といった音はママをママと認識したわけではない。「まーまー (ma-ma-)」が最初に発生されるのは「おっぱい」を口に含んだときと同じ形で、赤ちゃんにとって開くのが最も簡単な形である。ロマン・ヤーコブソン⁹⁾によると、赤ちゃんがおっぱいが飲みたくて「まーまー」の口で発音をすると、ママがおっぱいをくれるため、おっぱいをくれる人を「まーまー」で認識するようになるのである。換言すれば、[mama] は最初にはママの「おっぱい」を口に含んだ時に乳児が発生した満足げな音であり、またおっぱいが飲みたいときにおっぱいをくれる人に発する合図でもあると考えられるのである。ちなみに、英語のmamma、スペイン語のmama、ドイツ語のmamma とフランス語のmammelleはいずれもラテン語のmammaから来た語で、皆「乳房」を意味する言葉である。中国語の方言でもmamaで「母乳」を指す。それらに対し、日本語は形容詞「うまい」の語幹である「うま」を反復した乳児語の「うまうま」

で「母乳」を指す。辞典の記載によれば、「うまし」は平安以降には「むまし」とも表記されたという。そうすれば、「うまうま」は「むまむま」と表記される可能性がないとは言えないだろう。

要するに、世界言語の多数において乳児にとっての一番おいしいものであるお乳と一番大切である母親が、大体mamaに似たような擬声語によって表され、固定されている。そのような傾向は必然的である。ただし、amaで表記するか、mamaで表記するか、mamanで表記するか、またはmammaで表記するかは恣意的である。というのは、同じ乳児の発声を聞いて各国の人々がそれを聞き分ける耳の勘が違うからである。それがゆえに、異なる表記を採用したわけであろう。一見無秩序のように見えるが、よくよく考えてみると、以上に列挙する各国のママの発音はいずれも鼻音のm、nと母音のaとのなんらかの組み合わせである。こうした結論は上に述べるマードックの発見とぴったりと合っているのである。つまり、「世界の多くの言語において、幼児語で母親を指す語は「ママ [mama]」「ナ [na]」「アマ [ama]」など、[m]または[n]という子音と、口を比較的大きく開けて発する母音の組み合わせであることが多い」。

6. アマ・甘え

「アメ」「アマ」に関しては、人間が上を向いて口を開けて発音すると、アの音が出、口を閉じると、マの音が生ずる。「アハレ」「アップレ」というような語も、人間が天を賛美するか、あるいはそのような驚き、あるいはほめる、悲しむというように人間が発情するときに、口を開いて賛美慨嘆するという表情をするときに、自ずから生ずる音から来たのだというような説き方をした学者がある。すなわち、人間の自然の情緒の発露と、それから同時にまた続いて起こってくる発音とが、必然的に結びつくのである、というように説く。(新村13頁)

上の記載からもわかるように、母親の乳である「ママ(アマ)」に盛られる感動と、天や神様である「アマ(アメ)」に盛られる感動と、美味の「アマ(ウマ)」に盛られる感動との間に、本質的な違いがなくて、いずれも〈賛美感嘆する情緒の発露から生ずる発音〉であり、いずれもある種の憧憬である。その憧憬は乳児の乳への憧憬であり、天上界の天・神への人間の感嘆賛美であり、または現実界の美味への人間の感動などである。こうして、「甘えの語幹であるアマは、日本人なら殆どすべて最初に口にする乳児語ウマウマと関係がある」(土居102頁)とする土居の大胆な想像は、もはや想像ではなく事実でありそうである。もしそれが事実だとすれば、彼の「甘えのアマはもともと語源的に乳児期と関係があることになる」という推論も成り立ちうる。

著書の出版年を見ると、土居の論説は上に述べた新村(1976)、清水(1984)、増井(2010)の3著書における記載よりも時間的に早いことが分かる。つまり、新村たちの語源記述は、土居の論説からなんらかの影響を受けていると考えられる。なので「甘えのアマは乳児語のウマウマと関係がある」という土居の主張は、アマを乳児語と初めて関連付けたと言っても間違いがないだろう。

7. おわりに

要するに、甘えは語源的に〈乳児の乳への憧憬、現実界の美味への人間の感動、天上界の天・神への人間の感嘆賛美〉から由来するのである。従って、甘えはおそらく一番最初に「乳児が母親の乳への憧憬、乳の甘味への感嘆賛美、また乳をくれる母親を求めようとする愛着」から来していると推論したい。なぜかと言うと、人間は生まれて一番最初にくっついていて人が母親で、一番最初の食べ物としては母親がくれた乳であるから、すべての感嘆賛美はそこから来ているといえるからであろう。

(付記)本論文は中国国家留学基金の助成を受けた“‘amae’心理之中日比較研究”の研究成果の一部である。

註

- 1) 土居健郎『「甘え」の構造』 弘文堂 1971年 105頁。今後同書からの引用は本文中に頁数のみを掲載とする。
- 2) 芳賀綏『日本語の社会心理』 有限会社 人間の科学新社 2007年 125頁。今後同書からの引用は本文中に頁数のみを掲載とする。
- 3) 小学館『日本国語大辞典』 第一巻 1972年。
- 4) 増井金典『日本語源広辞典』 ミネルプラ書房 2010年 34頁。
- 5) 清水秀晃『日本語語源辞典—日本語の誕生』 現代出版 1984年 33頁。
- 6) 中西進『平仮名でよめばわかる日本語』 新潮社 平成20年 62頁。
- 7) 新村出『語源を探る』 教育出版株式会社 昭和51年 14頁。
- 8) Murdock, G. P. (1959) "Cross-language Parallels in Parental Kin Terms." *Anthropological Linguistics*, Vol. 1, No. 9. pp. 1-5
- 9) Jakobson, R. (1960) "Why 'mama' and 'papa'?" In Jakobson, R. *Selected Writings*, Vol. I: *Phonological Studies*, pp. 538-545. The Hague: Mouton.

The Linguistic Origin of “Amae”

Huang Ping

Lecturer, Yanshan University / Visiting Researcher, Hiroshima University

Takeo Doi, mainly from a perspective of psychoanalysis, defined the concept of *amae* as follows: Psychological activities (emotions) seeking mothers after when infants have experienced some degree of mental development and been aware that mothers and themselves were different beings. However, Takeo Doi did not research the etymology of *amae* nor the rationality of its definition from a linguistic point of view. To address this gap, this study looked at the modern Japanese verb *amaeru* and the adjective *amai* corresponding to *amae*. Furthermore, major etymological lexicons were studied (referring to Kojiki, Nihon Shoki and other classical records) and combined with phonology, phonetics, and early childhood psychology research. The following results were obtained: *amae* is derived from the “baby's desire for its mother's sweet milk” and “human beings' praise for beautiful things such as God and the gods' laments”. This leads to the idea of “the infant's pursuit of a mother who can give her own sweet milk”, thereby circumventing the rationality of Takeo Doi's definition of *amae*.